源太夫
大江山
身延
高野物狂
野守

三

源太夫

次第 曇りなき世の日の本や国つ神
の宮居たつねん　抑是は当今に仕
へ奉る臣下也扨も尾州熱田明神
こそ霊神にて御座候間急き参籠
申せとの宣旨に任せ唯今尾州よ
下向仕候

行末も道ある御代

源太三

乃猿とてやく關の戸さして相坂
の山を都の名残とて東路
道に出で行く旅なれども猶ゆく空
ここを先と山越田の宮よ見えて行く
朝清め落葉をさへも掃ひかぬ
世も松の木陰の神の御前に
行きかふ人の絶えせぬ

是は当社に年久しく仕へ申す者なり
さても此社のありさまや神乃志
殊にあり難き申せ世は家は前もとう見
さりながら此みちは海山の雲と波と
ようつりゆく気色をみてかかる所は
あまりても心の内も折よく思ひつ
雨しきよずとうりて拂ふは海乃そ

うれしくぞ深き数乃かみ国に安く至らん
法乃御舟弘の道を會ずらぬ跡の
恵をたのむありあゆみをはこび
年月を送りて老の身まで
上哥
流とよ思ひ居すまひ覚えて
そゞろにあらためる秋乃月よお
さ花よそ心を老と身は涼しく真
とかく心さへ宗神蔵も猶さやく
上 すまして暁天より星月の光さへ宮中を
あすは歳に星成老人まで帰し神前
を清め御酒をかこみ歳月をたのしむ
下 さらば
身は家にこそかへるとも心はすむ
是ぞ当社の宮つことみつからいく八
みうさかるみなくねに同じ前をかて

ひ時とハ底を清め信心をいたす作
今にく有ける大なる神おはします
みさきをおひやりし事なされなき
まし乃ち見ハ大内をかこさい守と社ト舎き
それぞく当社乃みさきをとこそ謂て
まいらん　御不審ハ当理ふらんずるぞく
も当社を申ハ出雲乃大社と承リ一

躰乃かみなるへし　去ハ我も当時そさの
のおほえるも出雲国にましまして御宮居
有しかり時ハ八雲立出雲八重垣
妻こめにや八重垣作れるその由を
家の申由緒ハある也不審ハあさけ給
いとそとよ　又有けるいなるに梅ハ
出雲と此一所にて和光垂跡乃御事にや

抑ゝ謂をたつね給へ　景行天皇に二君
ますやまとたけのみことゝ申は東夷を
たいらけ国家をしつめ給ふ宣旨を蒙て
しめ給ふ　民をさまるをも御年久敷
生涯の方便なく　あるひは人の世
或は又　神代無双思出も代ふるや
柱々立そよ雲も八重垣乃ごとく

ゆるされてはなもことに　松がえは柳にかわれ
たゞ孫々の御神前一本まあかき
給へや時を三代の夏の日乃かげりての
宮路を語るもひかげてまさにけれ
波松風乃声や夜毎のさとびも心守
まさく光の影を百夜も渡りたりし
抑ゝ当社の御神秘深く御物語候へ

クリ それ和光同塵の御誓、普く世に満ちて
まことをもらさず、殊に我朝は神国にあり
すゝめ神は是を助けたる神徳なり
然るに是は景行天皇二の王子御名はやまと
たけるのみことゝ申す。地神五代は天照大神
の御弟素盞嗚の尊、出雲国
にながされ給ひ宮居し給へり

上ゲ 家に数の門よまでいづる色あり
下ゲ みるといふ老人夫婦の中
に姫をいだきて泣居たりしを見給ひて
やゝ尋ねよ 翁答へて申すやう我は
てなづち是なり。姫を八人もちて候ひしが姫と
共に大蛇のいきみをとられて今此一人残る也
とゝせ八ゝ大蛇に是姫もとられよとさけぶよ

こな稲田のはへとかくの素盞嗚の
心姫みてざる姫をもまほ給ふ大蛇
を切り給ふ尾先に有し剣を村雲と
名づけしをまつりしかやつるきの宮に
御子よりきこしめす此の神は熱田の
宮ず姫也父の尾張の守にて深太
まの神とあらはれ東海道の擬人

をもちらしと勅定なし給へり 宮ゐの鍵
き神秘のものを見る人まれなりとうけたまはる
御名をまのあたりにかくし給ふ 今の在家ある
つむへきぜひの門にあまる神の 我は手
まつら 見まつら 女姫見
あまもおり 常にまをす此宿は勅宮
の使ともなりてゆくへあらはさて神ならで

人のうやまひけるゝまれなりしまてもむたなかに
ありかたかりけるゝは源太夫の神とそ
名を季とてゆかりは末代の威あらはし
まもりよきり　我は見えぬ宮居を
のもちろてもちくうなる誓ちよくもちしよ慈
をまつる結縁の衆生擁護の誹立
花脱ニハ我の也　我は又結縁者

衆生利益のしるしには東海道の日
本守護源氏の神とは我なり也
あら有難や　宮居の御歌向
感涙肝に銘じつゝ心空なる計なり
神姿をあらはしつゝ月や舞楽の曲
をつくし数まはしへにほんなるさん
宮居の見えもいれさりし梅やくら

天女 急作の中に出る太鼓はやく
天女 まれつら御身 深き夜かへり かまいし
をしけるに 思ひ出ぬ 昔をうち
たる太鼓の御返へをもかなる極曲
をそへくれるを拍つる楽拍子は度
うちよれも波の声へ面しろやなつ
思ふや 一拍子しろなれ拍子楽やく

時しもあきや月も照らし松風をも
ましはて秋ありひろきける折ふしに
ごとぞる人間のありとも感應あ
こらなするやこさ拍子てや秋なれさと
思ひなれたる宮をもかなる御代のため
治世の声は安楽なれ和を琵琶は玉殿よ
鐘の声もよきうちなやうよろこびなる時守

壱ばりやせとおはし舞寺の曲ぼどうれう
作りとげけるやめかりに成けりしは都よかい
祝るは動乃便楽とうらおかの遷城を
りやく乃穀の壱しや二十五拝乃教更
乃一天より夜ハさうくとそめよきおる

大江山

山伏ロイ
秋風乃音にたぐへて西川や雲もゆ
くなり大江山　抑是ハ源の頼光とハ
我事也扨も丹波の国大江山の鬼
神の事にかみの都を望みをつ
ばかすべ保昌に仰付られ　月よりうやまま
さ申せす綾大勅命をうけて人倫を

らぬ住居の有様にてさふらはせ給ふ
べきぞ　ワキ「然らば子細なし山伏
の姿となり出立て　ツレ「冑は笈に入れ
兜巾を着　ワキ「よろひのあふぬ上にかけを
や　ツレ「兵をよ對する笛ともあひ　ワキ「さ
ぬしくは頼光保正　ツレ「さうらへ門
すゑたけ綱公時　ワキ「まつの名をいふる

ひとり武者　ツレ「總じて以上五十餘人
ワキ「まだよのうちにありあけの月の都を立
出てゆく末は西門やたま
路そてゆくの道のかぎもなのむや
鬼神なりとも大君のめぐみにもれんかは
あしたゞかきや此東たれの
山よりおくに入りく　ヲカシ「いかに童子の在所

シテ詞 皆う童子とよはゝせ給ふる者そ

ヲカヽル 山伏たちの御入りかな一夜のお宿とおほせ

候ふか シテ 何と山伏達乃一夜乃お宿

かなはじやとうめや桓武天皇に御請

申せし比叡山を出しより出家には手

をさゝじとかたく誓約申せしなり中

門乃ほとり廊下をとめ申して シテ かくいふ客

僧達は何くより何くへ御通り候へは

じ隠家へは出まじきそ ワキ さん候

是は旅業者山乃客僧なるか 樵の

きのふもたそよりの道に踏まよひ前

後をわすれたるもの故に夜に宿乃かれ

やと行よるをみて旅に宿申ば伝給名を

酒天童子と申候は行と申たる謂ほく

候ぞ　シテ　我名を酒天童子といふ事は
明暮酒を好きたるによりけんぞくた
ちに酒天童子とよばれ候さりなから是
見給へ友につきぐを酒ほど面白き
ものはあらじ客僧達もきこし召
ワキ　仰のごとく猶も一献下され候さて此山
をばいつ乃比よりか御居住候ぞ

シテ　我は比叡の山を重代の住家とし年
月を送りしに大師坊といふゑせ人
嶺には根本中堂をたて麓に七社
の霊神をいはひし無念さに一夜に三
十丈の楠となり奇瑞を見せし
所に大師坊一首の歌に阿耨多羅
三藐三菩提の仏たち我立杣に

冥加あらせ給へと有りしかば仏たちも大師
坊にかたうなされしがよくときあ給へだち
からなくして重代の比叡の山を出
でしより　ワキ上セル　扨比叡山を御出ありし其
まゝ何処に有るか　シテ詞　いや行くゑを
定めなき雲霞とまぎれ雲よりつて
地上セル　そなた方のあまりける鄙のをちこちや遠
夷中　シテ詞　御身の古はひとしからざるも　上カヽル
同じく仏也　ワキカヽル　梅は猶し天下たりつま
打見の旦夏のたさめでさよ　シテ　都の道を
行脚して　ワキ　あるひは青山　シテ　伯耆の
大山を　地　白山立山富士の御嶽　シテ詞　うへの
空ゆく月のさ　ワキ　雲の通ひ路迷ひなく
シテ詞　都も隣也よこらひく　ワキ　都のあたり程

近き [シテ]洪大江乃山中庵居く [甲]君
くの御住居 [シテ]かくれ住ましてて
ある所よ今客僧達に見えあうもれ
中々通力も失せあまちり [甲]御心易く
思召を今乃我もあまし [シテ]ちれくく
く一節ニ頼こそ一樹乃陰 [甲]一河
乃流れを汲むしれ心ハ慈悲

乃行 [シテ]人をたすられ御姿 [ワキ]神ち
をとより出家乃うち [シテ]童子をかそ
乃山そうち [ワキ]さらし童形乃御身ちれハ
[シテ]あちれ給へ [ワキ]神ち居あそ 一見ニ山王と
たちかまへハかくれ家さるよしそかし
御身ハ客僧神ちる童形乃身ちのまはなとと
かあられ給ひさうしかまへて人ニ語りて

都よりせきを経て陸奥乃安達原
乃塚よこそ鬼籠れりときゝし
都近くも有て大江山
生野乃道ハ猶遠し天乃はしたてよさ
乃海大山の天狗も我よしたしき友そと
志ろしめりましよいたく酒のまゝよ
くだりておさなへ行てそゞろを

秋乃山草桔梗かるかや我もかう萱と
いま行やら鬼の志こ草とハ云れつゝ
名をかくれて今にまいりし丹後丹波
乃境なる鬼か城も頼なし
まよの山酒ハ杯そゑぬ酒も皮
何く我き酒乃名をおき鬼かて行ておのれ
そよ兒君とおもく我よおもまく結

ちぐ真る友と思召をさゞたしそめられ

比叡の山を先祖よりすみかとさだめて

てつぼうひろ山守りをめぐらさんとて

だいしばうといへる人の嶺にはよそほひ

やさしき嶺々よりたちよみだれたる雲

打ち重なりて其まゝ同じく鬼のまはり

入りて海のおもやうしきゆめくある乃

かくてよろひくちてはしよ8

すまかの宮ちぎり閨さし鬼が城鉄の戸

ひらを押しあきてまし(い)く鬼気やい成

まくらへのかゝるとをりゆうそれ

たけ二丈あまりのなれば鬼神の姿

ばかりなるたちをいさほひのあまりを

ちよきつ北のれ見るく知りたる方

改 頼光保正

それ我中命ハ君のまもよハ神国氏
社ハ南無や八幡山王権現まわりの力
をそへ給ひて頼光保正綱公時なと
三人をたのみひらむや思をひとつ
にしてまどろうふしたる鬼のうへ
ばうたちとこはるかたき稲妻震
動あれしとよ雷電
情あかしとよ雷電

いかりあらしと云つゝ鬼神ハ撰道
さきのごとく鬼神ハ撰道あるなや
中くらうす つらそうちゃうさ
頼光ハ鬼神のまへにとびかゝり世ハ
まさにたのけるぞ神の御影を国
保正ハたゞひとり武者だゞ神
ありがたき道をあらはしてやう思ひハ勒ある

されば土も木も我大君の国なれば
いづくか鬼乃宿りなるらん〳〵
なほせめよや責よ〳〵とて責むれば
きびしさにたへて切りかかれば山河草
木震動して光りみち〳〵て鬼の
まなこはたゞ日月の天津星照らすや
さしもおもてをむくべき様

なきを ワキ下 ハタラキ 井上 頼光保昌ちからもなく
鬼神成ともおそるまじの手並
みよやといふまゝにきつてかゝれば
つくもちからもつきてあまむむ
えいやとくむとぞ見えしか頼光下
になりて鬼一口にくはんとす
おし伏せ下より刀を抜く

に
二刀三刀打つゞくかゝるおとち
かゝるよそひやとせしざをしき手にかゝる鬼
神を押つけわつる首を打落し
大江の山をまた踏分けて都へとて
こそかへりけれ

身延

ワキサシ
凡方便現涅槃星霜二千二百餘廻
後五百歳中今かゝる廣宣流布の
時を得て弘めし妙法蓮華繁昌甚白
目出度かりける時節かな寂寞無人
聲讀誦此經典の窓の内今三
千乃花薫じ我爾時為現清

浄蔵貴所の上人は三観の月
みつからの遊楽をしせし身を
山の風水も讃誦の音様く自然の
霊地なりきとよ 松吹風も法の声
こゑ〳〵にはやしたてゝすみ〳〵に
白や四方の梢も秋のけしき野辺の鳥の
千種も様々によみきこゆるを生まれつ

ゆのそのけ姿をも其まゝに紅葉し
をけいざれ尊也 捨をしけりを流
まつ成仏表法替頼りしきに幼き
子の母よあひぢく 飢さん者の食で
をとめふうちなる去乃衣をぬきたる
あらなりけ渡得船の海の面まで
その守るつきいざまなる車をいう

きく人御法をうくるよ御法法をうく
身もおかみ那　ワキ詞　我心我宗によひ
御経読誦の折ふしに御身の一時も
ありかたき事なれともまことになさて
乃人と見えたりぞそのいはくよりき
たまはる人そ　シテ詞　是なるは山居林麓に
すまひする世なるかいかなる人の

山河よりは上行菩薩の涌出
従地とかつてあめくてつれなる
御法はおこりてとかつてまた女人の成
御えとれ法の場よいつらく嬉さみ
婦かさに　ワキ詞　実に是は理りなりさりかき
こなたも宿りのみまことより時なるへぬ
此しまみえ給ふを思へばさも不審なり

げにありがたし世にあはれ人へもぞ妻かなしみ給ふ
やし。シテ 早も心得給ひたりげに世
よ有さいさあるかげりを有難さは人へ会
御法に値遇の度りを知りて苦患を
まぬかれし海ならず。妙覚果を為よ主
我へ今此妙法蓮華経の功徳に恩儀
まつら那いざ仏果をとげ

つきせぬへただもおん御法の花の色ぞ
変成まいらせしをかたひきも地に変成男子
院へ神まり此を覚の跡をあひ龍女は
うろもしろしんかしこまとふをあるがれすと
ぞつらさは古への乃ざなさもわすれさ
かさぬ悔しさへ手たひ悲しきいかなく
よろこひの千嬉ずれの袖もようて

佛をたまし故れ法にあふ事よ難し
人の沙那前は法華経にあふことはかたう
宗や見思愛執の激は四大海より
ふかし聞法随喜の其為には一滴を
おとへとめ其経や流羅如露
露恵日の光りにあてゝ即身成佛
なりぬれば調達も五逆の因にも遁

まして阿鼻なりとも経に法得
乃童子戯ハ況や受持讀誦せむ
をや只一時を結縁をなされて則
仏になりき帰命妙法蓮華経一部
八巻四七品あらはくも神力が志
めぐりしに濁乱の衆生なれば経
をたもちそうふしてもたまへり

来れば我則歓喜して諸仏の志なり
聞と一念乃妙文なるかなて深き空虚
妄法出受不可捨てあらす寿しめ
華厳乃初法より般若に至る四十余
年未顕真実乃方便成仏乃ことと
打ちすてて妙法蓮華経こそ正
直捨方便無上道なれ首を垂るべき

有難やしな経乃文字かたまくも優曇華乃
花ぞ待えたる嬉しさの今乃涙とし乱れしや
おりしろやなやすむ法の花の袖ぞかは
日やつきぬらん仏恩の報謝乃為
乃みこそ乃みぞ誠に曇雲をひき
のかりけり千搢よとく出れしまて
も妙法蓮華経のこれへうかおでなる

かゝる法の道ぐまくうるぬき
さうしれなずさこの迷路をてらし給
ぶ門のきつかぞしおなくも得脱成仏
れ御法はありきこありかなや頼もしや
け法の声をきゝけるくしぞくて
よしや日も入相の鐘ひゞき出て
いふをゆうすれ法の場ぞ延のやま

乃の粉れそと求のゆゑもものゝゆ
諸法実相ときゝつゝ草木国土皆
成仏の霊地なりきとく

高野物狂

シテ次第

鶯頼む梅か枝の行末やくらまし
の花ぞとうれてん
詞 是ハ常陸の国
の住人平松殿に仕へ申高師の四郎
と申者なり扨も頼ミ奉りし平松
殿ハ去年の秋無常の嵐にさそハれ
給ひぬ又春満殿と申て御子息の一人

此浦の渡ハ方をハ果に頭を置きて御座
ハ遺言により殊に斯時も離とて候
又われらもわかき観とも申すとも可に
平松殿の御位牌を立置申てめぐ
日ハ命日にて候ほどに寺に参りて焼香
致さうと存候　昔在霊山名法花
今在西方名阿弥陀　娑婆示現観世音

○上ノ外
あゝ心許なや。
見えくれ身をね
ス入ヤ此ヘ――

三世利益同一躰　寄者離苦進殺
上　慈眼視衆生慈悲の誓ひ普く
日の影の曇りなき世の恵の浪の
世のうきに帰しなりし丈夫なりし
人身うけ難く仏法に逢ひがたき　如来の教法に
逢ひ国の燃ゆる火宅の渡の舟
ゆるさん心地して昔も恋し夢の世に

今を捨てハ後に又三途にも迷ひなんず
欲てもなを餘りあるハ生にはしかずを
浮めまいらすの時とこそ思ひ見え給ふ
に一子出家すれば七世の父母が仏生を
済ふまじいかなすを捨て世の鳥にも浪
別れつ父母のほにのつらきにまでれ親を
助きんるす執心の大慈悲にあらんと

思ひ切はては家を出修行の道に趣くにし
父母に別れつ其後ハ嗚呼おとこを祉ひ
まちまちに父九母とも都こつるに角
とも申けれく別浮く見ちぢさこを出し
父母に二度ひ別れて心地しくほ名給
まて惜う人のまひて露のまにまよ
三年うらよいうあひしくぞみの行

佛ともなつし世をいとひし身のほと社借う
たゞ墨衣思ひそめし流石世を出し身の
の袖はぬれまさりけると　遊ひくるひける
云ひ捨の数々の花をそへ立て所
若成果をしつかなる根わの山車
やがて憂世を捨のみならず三世の道の末
あらはいつくも道も心にまかせしや伴ひ
行ぬる今は散行花身の影山木陰
を出過ぬる行佛たいうて雲水の流れを
慕ひていつのまつぬ道あるてもなき
く此日重し花の袖へ今日墨
染の彼の心地吉野山の住僧よ
て又是よりたちは人はいつて
文知恩愚僧を心数ころ師弟の

契約をなしても又ある日ハ三鈷の松
にのぼりて魅の申けるをもしなけれ高野
に出会章とて思けるれば霞初る空
に帰る雁の翅に付し蘇武が文字ハ
古郷の旅衣君を忘れぬ忠勤の心
君辺にありし雁札そりそ音もなき
玉の行衛をうらの宮城の跡を書や

あはれなるくの陸奥紙に書送るべき
文を見るの筆をまとぶ筆かほつゝまの
の行衛やかの呼子鳥けそとりし花
の行衛を尋ね風狂しておれ
肌身に添る此文を懐紙と人やみん
朝を起に此の関越てぬかのやうし
路や高野の山ぬるもこぼれけるとの来済

今行ハ宮も紀伊の山中とんと登る
と思ひの首途発心あるも捨吾主君
恋しやと高野山雲のかかる道をいざや
尋ひのほらんいさゝく尋ひ上りて立寄る
雲路のはく宮ハいつくる聖山よきて
てしハきまゝ中家式て念仏称名
の声〳〵打ひハ鳧鐘鈴の声耳よ

そうぞ心さとる鼻揚指の指ひきる心や
詞 いつけてげづうさてある人と道の辺の
便の縁待ちあう〳〵嬉しとう主君に逢ふ
んと頼み祈念しらく三鈷の松の本に
立寄て休まん同じ立寄て休まん
詞 いかに是成三鈷の松とハ此まつのことか
甲 けん此三鈷の松とハ此松のまるそは

不思議なれ婆さて見まへ其形ならされ
ぞこもはうせいつよりまある人そ
詞 実能は賢きろくはまへは放下
まそのお斧とうされ放捜しする捨着
にてれ 甲 此様の柱あちもうは荒る野
のけへ叶ひはまだ人よさうゆられ
ぬちえよかくらく出へ 詞 是は利益

ぞうもちいはうのぱへとぞ鳴て此山を移る
さは唯海もしいは情あやぐへとを為
ひとはいかえずの語界清浄の地よ
べ宮まゐる高野の山とぞ海より出よ方は
説教心をもそそはへとよ 開 きまうかる
ゆすとや物部へ宮まゐる高野の山ぞこへ
ぱ言伊の鋼耳よかて海まうり 詞 入定

ましまさうには入定よりなほ未来をまつ野の
内ふかく入定とし給ふ事久しく禅
多くは云はれ此やうんなあらん角世を
遁れましき身を捨てゝ高野よしまするは頻繁
あらんや　法はおしへ人を導く露を
悟し其身を捨人か　いや誠める
主君を捨人なるまじや出家の修行

されば捨るうき身を捨人と　左様の
出家の望あらば何とて様を捨人ざるぞ
いや法を没ぬ社発身物縁の故なれ
発心物縁の儀なるべし仏不二の道
を知まうや　事新しき仰候を
大師の御身は内に三昧目前とて是正
却も人仏不二　あの羽勝なり空

そも大師は生有なから生死涅槃に
入定ましまする野の奥今は此山に
海のあかり昔薩埵の所明を
さかりて慈氏の下生を待つの事
偏に佛不二の妙解あり　大師の侍
給ふ秘密慈尊三會の暁普は三世の
主君と尊て此高野山によしまりそり

クリ
抑此高野山と申は帝城を去て
二百里京里を離て無人声　続き
末世の隠所として皆界清浄の
道場なり中にも此三鈷の松は大同
二年の帰朝以前に吾法が結縁
満の地の印に投り留まらく三鈷
さるのきとさせまひしよぞ此りとれに

高きより雲の梯の端よりてまり
経とは法本の中よりこそ松に笛
まる具あめし千代萬代のまちけて。
久しかれとの方便要て旧化に歌き
なりけれハみや真如平等の松
風てへ楽の音のさて静に吹流
性海縁の月景新ハ川の谷の鼻

出して誠に三會の曉を待とくと
経とハ即身成佛のおもと説り
入宮の地をみつ深くる奥の
院の山鳥の声聞て散花落葉
嵐風まうく常都念の法ハ是
そてを又常住の皆今仏道をうへの
相を教へす
経といふこそ猶りて

さるや四季折くの其たよりも身の隠
栖へ時人とまるいさるに貴賤群集
の雲霞のひさる野の山ぬりて谷
嶺の風常楽の曼ちめ法の称ぬ
妙なる心耳に聞り満くて唱ふ
大法業聲ハ高野山て静なる哉
地なりけり春き霞の奥の

高野山　時しも雲の花壇上
北く門傳法院御影堂三宝院より
苔ぬらく雪も奥の院より
も見るよりも心も常盤の三鈷
の松陰に立よる雲の風狂しける
物狂ひくたまきや高野の
内にてかく狂をめくり制戒を

思出てらひりゆるさせ給へは
聖ゆるさせ給へはきりつ主　いつまては聖
にかたらんものは　何事そ仰そ
是成物語ひを能く見候へは古は
に留め置つる跡のとにて候
不思議なれあまきに海　まれは主君
まう蒲殿はくがは跡をとるくまで

此上何としてはれはみはらそうまし候
かねてあらは情まやは　是は姉
この来縁は侍おとしれ国へいつそ身や
常陸の国筑波の里　文の名字は
平松某何某　又おとしらぬとへ
高師の四郎　何も知らぬ　ささ
三世の契りを結べは是を送ると給の

玉やとる野乃山雲隠頼む主君に逢

そ嬉しき。本より縁乃相和なる

主君乃為なれハやかてもとゆい

押切てさき墨染に身を成し

主君と同じ捨人乃代中は

志し貞主従乃道しるやく

野守

第

毎よ露きさ旅のやく衣乃袖をかさね

くむらん

是ハ出羽乃羽黒山より

出たる山伏にて候我大峯葛城よさ弄う

また仮須よ此度和州へと志し候

ほとの宿りまま乃草枕ゆくぞへ

ゆふとうし起別し旅乃眠を今さら

にかゝる程の日の影まさに西へかたふきぬ是
ハ大和の國に着きにけり 急ぐ
程に和州奈良の里をも見過て
けふあふりの前をしるねやと御
春日野乃飛火の野守出らく みかさハ
今いくほとそ若菜つむ 見てよこく
さらぬ老人ハ此春日野に年を経て

山かけも遠日里かもゆく野守乃翁に
て仏もり有るや鹿悲み行のまの
色ご三笠乃山に長閑みらくが五重唯
識乃秋の風春日の里にてとつから
滅に棚ひを立ちらや非乃ま二く
行くもり里に来乃も仰りれ老のさい
うゆく御歌あふくもり ウ唐士遠

上音 聞えあるは山宮寺なれりたうさい
昔し仲麿が我日本を思ひや
り天の原ふりさけ見れは春日なる
三笠乃山陰の月かけは明
がなれ月あきらやかにまさる代になれ
まい日長閑き気色かな ワキ いかに
是なる老人に尋ね申へき事乃候
シテ 何事を御尋ね候ぞ ワキ 此方ハ此所
乃人か シテ さん候春日野の
野守にて候 ワキ 野守ならはまつまさハ
是によし有きめる水乃候が名有
名水にて候か シテ 是社野守の鏡と申
水にて候へ ワキ あら面白や野守の鏡
とは何と申たる事にて候そ

シテ「我らごときの野守までも申
ならはす野守の鏡と申せバ又誠の
野守の鏡とハむかし鬼神の持たれ
鏡とこそ承り及べ　ワキ「何とて鬼
の持たる鏡をバ野守の鏡とハ申ぞ
シテ「むかし此野に住ける鬼の昼
ハ人となり此野を守りけれバ夜ハ

鬼となりて塚に住けると也
されバ野守の持たる鬼の鏡とかや
ワキセル「さてハ野守の鏡と申候
謂をきけバありかたや扨ハ此野守
まことに鬼の持しを野守乃鏡とハ
云ひ　シテ「又ハ野守の影をうつせバ水を
も野守の鏡と云事　ワキセル「両説何れ

も謂あり　野守か持ちたるハ昔も今

も　ワキ　實かたらうおもきり　シテ　御覧候へよ

上哥　立よれハ實も野守の水鏡

影をうつしていとゞなほ老の浪ハより

水乃荒(?)くまて乃むけり　是哉(?)そ

哀しさはげにや老ひてそ甲斐なかる

かゝる古への野守乃鏡見る事を

年ふるさへ世乃例のやうに　ワキ詞　いかに申

扨さうハの着鷹乃野守の鏡なと讀

まれたるも此水に付たる事にてや候か

シテ　さん候此水に付ての謂なくは語て申

と申候へし　ワキ　さらハ御物語候へ

シテ　昔此野に御狩乃有しに御鷹そら

し給ふかかなた此方と尋ねあり

かゝる人の野守の鏡とて御鷹の
行ゑやしらんと有けれは向ふ所を
彼翁申やう只今御覧候水の底に
社御鷹の候へと申けれは行幸に御鷹の
水の底に有けるを見て御鷹を尋
みえしハ君をまもりの水の底にある
おとなしくて其水の鏡とぞ見まし

これ下の水ようハ君か影なりされはとて
や鏡をも末居に有ける梅ちをもまつし
鷹のゆくゑを知るの鏡とかや野守か
うつせしもの人の全前ありとかくを
求の鏡なるとは故有りける滅ようこ
き時代とてみつのまをもけさけは野
かしらひの野より出かけて数多恵子

かゝるためしも思ひ出の世語りを。
申さんはおろかなれく 上ロンギ地 げにや
むかしの語りにつけても此野
守る鬼の鏡なんとて シテ上 思ひよらぬ事
やさしやそれかゝ鬼神の鏡なれはいかでさん
ましてさい 上地 姿やかゝる前まてまて
さてまた日頃の シテ 野守と云ふも我なる

上地 ましい鏡かな シテ 見るはさらぬを
鏡なきをいふかや鬼神の持たる鏡なりけみ
ヨワリ ろいでてきまや一鏡ん誠乃鏡なりけん
事いかなるまことの寄るとかや水鏡
さらば鏡をとて塚の中へ入りにけり
乃ちらこそ入りける ロキセル こうれ等持よ
あかつきしばし行けば乃ゆへなりかし思ふ

こゝろを便にて鬼神の上よりは塚の
前にて肝膽をくだきいのりけれ
年行の功をつむ法力の真なれ
ば鬼神の明鏡あらはれて持ち寄
持ちたる鏡を南無歸依佛　有
難や天地を動かし鬼神を感ぜしめ
去程に山伏峯木を　一仏成道の法味
まひらとて鬼神は横道をなく
野守の鏡はあらはれたり
さりながらや鏡の影に姿の鬼神
の眼の光り面をむけて横たはり
見つる手に持つ鏡を鬼神は塚よりあら
はれて　されども鬼神は行者の前に夜
かくて見るよりなほ夜の鐘　時ならず

悔を野守乃かゝみ　ワキ　法味ようの
給へとて　ワキ　重ねて珠数を　ワキ　おし
もんで　上同　台嶺乃雲をしのぎ年
行乃功をつむ事一千余箇日しば〳〵
身命をたうまれよ
ありさいそうまれよ
降ろしおろしかゝりたるに
ならひ七大八大金剛童子　東方

東方降三世明王も此鏡にうつり
又は南西北方を写せハ八面玲瓏と
明らかに　上地　天をうつせハひさうひ
さうてんまでくまなく　上地　扨又大地を
かゝみ見れハ　まつ地獄道　ちくしやう地
獄乃有様をあらはす一面八丈乃浄玻
りの鏡となつて罪乃軽重罪人

のかしやくぢり屋鉄杖の数をあらはし
ゑんま大王も恐れて罪科に稽首道を
まことを明鏡の宝なれぞや地獄に
帰るとて大地をかつぱと踏鳴らし
まだ大地の底とかつぱと踏みて奈落
の底にぞ入りにける

右之本者観世太夫織部
以章句真本今亦新令改
版者也
寛政十一己未歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二條通御幸町西入町
山本長兵衛